



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	無形文化遺産リストの光と影：音楽コンテンツとツーリズム，中国雲南省ナシ古楽を事例として
Author(s)	宗，ティンティン
Relation	コンテンツ・ツーリズム研究の射程：国際研究の可能性と課題 = The Scope of Contents Tourism Studies : Proceedings of the Symposium: "International Comparative Research on the Spreading and Reception of Culture through Contents Tourism", held at Hokkaido University(15-16 March 2015).
Citation	CATS 叢書, 8, 189-217
Issue Date	2016-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61146
Type	departmental bulletin paper
File Information	CATS8_8Sou.pdf



無形文化遺産リストの光と影

音楽コンテンツとツーリズム、中国雲南省ナシ古楽を事例として

宗ティンティン

中部大学国際関係学部講師，プロ・ミュージシャン

1. 雲南省麗江の概要と調査の契機

本日は、中国雲南省の麗江についてお話しさせていただきます。山村先生と共同研究されている方の中には、麗江に行ったことがある方も多いかと思います。私も 2001 年から昨年の 2014 年まで 16 回ほど麗江に行きました。日本に来てからは自分の故郷に帰る回数より麗江に行く回数の方が多く、そのことで母から怒られました（笑）。なぜ私が麗江に何度も行っているのかといいますと、私の研究の話にもつながりますので後ほど紹介したいと思います。

ご紹介いただきましたとおり、私はプロ・ミュージシャンです。中国琵琶という楽器を 6 歳から習っています。私は楽器が弾けるからこそ音楽人類学の研究者になれたのだと思います。もし楽器が弾けなかったら、ここまでの調査は出来なかったのではないかと思います。

まず麗江の概要についてご説明します。麗江は中国の西南部、雲南省の北の方に位置しており、チベット自治区と隣接しています。現在の人口は 125 万人で、60%が少数民族、40%が漢民族です。そのうち少数民族であるナシ族は 24 万人です。昔から麗江は西南シルクロードの重要な経由地として様々な文化の交差点となった所であり、多文化共生の場所でもあります。

ナシ族は漢字で「納西族」と書きます。今日の発表ではカタカナで「ナシ族」と表記することにいたします。ナシ族の酋長である木氏を通じて、明の時代から多くの漢族の文化をナシ族の文化のなかに取り入れてきました。今日の発表の内容であるナシ古楽もその 1 つです。

スライドでは西南シルクロードの地図をご覧ください。雲南省はちょうど鳳凰のような形をしています。一番南のところにプーアル茶の産地の普洱（プーアル）という場所があり、ここは東南アジアと隣接しています。そして上に行くとい麗江があります。麗江からさらに上に行くといチベットになりますので、チベット高原を越えて、インドそしてネパールに行くことができます。ここで主に何が運ばれたかといとプーアル茶です。山岳地のためラクダも人も使うことができず、馬の背中にプーアル茶を乗せて運んでいました。西南シルクロードの交易の方が、西のシルクロードより 200 年も早く行われていたという記録があります。みなさんご存知の陸のシルクロードには、私の故郷である西安から出発して蘭州を経由して西寧、タクラマカン砂漠を通して中央アジアに行く道があります。この道を最初に作ったのは張騫という漢の時代の人です。張騫が書いた文献の中に、自分たちの作った貿易ルートより 200 年も早く、南に塩とお茶の道があったという記録があります。その道はどのような道だったかと調べてみると今の茶馬古道です。また、茶馬古道の途中に那曲という所がありますが、ここから西のシルクロードまでの距離は非常に近く、そのため雲南省は単に

少数民族だけの文化ではなく、古来様々な文化が流れ込んだ多文化、多言語、多宗教の地域です。

次のスライドは私が調査している麗江古城です。麗江古城の特徴として城壁がないことが挙げられます。なぜ城壁がないかといいますと、ここの酋長さんの名前が「木」なので、もし城壁を作ると「困（こまる）」という文字になるからです。そのため昔から城壁は作られていません。1996 年の大地震を契機として、麗江市は地域のインフラの整備や空港の建設などに力を入れました。それは 1997 年に麗江古城を世界遺産に登録するためでもありました。麗江古城は年間で約 450 万人の観光客が訪れており、中国でも人気のある観光地です。450 万人もの観光客に対応するために、古城の中には 2000 以上の民宿が作られています。規制により高い建物を建ててはいけないうので、民家を改築した民宿が多く存在します。

450 万人も観光客が訪れると、どうしても騒音の問題などが生じてしまいます。そのため、住民たちが市外に引っ越すようになりました。引っ越した後の家は、よそから来た商売をしている人たちやおみやげ屋などに貸して、その家賃で暮らしている人も非常に多くなりました。これについては山村先生も研究されていらっしゃると思います。今年も麗江古城に行きましたが、古城の中心地から離れた所に行ってもまだ民宿を建設している様子が大変多く見られました。

続いて「納西古楽（ナシ古楽）」の説明に移ります。無形文化遺産と言ってもいいと思いますが、無形文化遺産にはまだ登録されていません。その話はまた後ほどしたいと思います。私とナシ古楽との出会いは 2001 年です。当時はまだ観光客は多くありませんでした。雲南省の山の奥にこれほど綺麗な街があることに、私は観光者の 1 人として大変驚きました。

それよりもっと驚いたのが、ここで演奏しているおじいさんたちについてです。私は音楽家としての好奇心が湧き、それがきっかけで研究を始めました。好奇心が湧いた点は 3 つあります。1 つ目は、ナシ古楽の継承者不足についてです。演奏されている方々の中には、70 歳以上のおじいさんがたくさんいます。私は 6 歳の時から西安音楽学院で琵琶を習っています。一般的に、若者やきれいな女性が演奏すると人気が出るのではないかとされているかもしれませんが、しかし、初めて麗江を訪れた際に、演奏者がみんなおじいさんだったので大変驚きました。おじいさんたちは 2 時間も観光客対象のコンサートをしていて、行儀正しく座ったまま動かないのです。たとえば、トイレに行くことや、体を動かしたりすることなどはなく、しかし行儀が良く音楽に対する理解が非常に深いのです。それは私自身が演奏者だからこそ驚いたところでもあります。静かな曲なのに心を込めて、自分たちが楽しんでいるような姿で演奏を披露してくれたのです。

2 つ目は音楽のメロディーです。私は西安の出身で、唐の時代は長安と言いました。中国琵琶も伝統楽器ですから、小さい時から唐の時代の音楽を模倣しているような曲を練習していました。そしてナシ古楽を聴いた時に、ここは雲南省の少数民族の地域なのに、なぜこの音楽のメロディーは西安のメロディーに近いのかと驚きました。こんなに山の奥でどうやって漢民族の宮廷の音楽がここまで流れてきたのか、興味深い謎でもありました。

3 つ目は使われている楽器です。演奏家のみなさんが使っている楽器は私が見たことがない楽器だったのです。ここで演奏されている楽器の形、とくに琵琶は私が使っている琵琶と違ってかなり胴が大きいです。むしろ、日本の正倉院に保管されている琵琶の形がそれに近いのです。私は敦煌の莫高窟の壁画や中国のいろいろな仏教の壁画を見に行ったことがあり、ここで使われている楽器がどこかで見たことがあると考えてみたら、壁画で見たことがあると思ったわけです。

これらをぜひ調べてみたい、ミュージシャンとしてぜひこの謎を解明したいと思って研究を始めました。ちなみに、演奏会場の写真を紹介しますが、スライドでご覧いただいている写真は 2001 年のものです。演奏家の人数がかなり多く、この時は 30 人ほどいました。演奏ステージの上に飾られている写真は亡くなられた演奏家の写真であり、この時代はまだ（亡くなられた方の写真は）少なかったのです。後ほどみなさんには、最近撮った写真をお見せします。

2. 洞経古楽の形成と継承の経緯

次に、ナシ古楽とは何かということについてお話しします。ナシ古楽は私の耳から聴くと明らかに漢民族の音楽です。チベット族の音楽でもない、隣のペー族の音楽でもない、そして雲南省のイ族（彝族）などの少数民族の音楽でもない。これは間違いなく漢民族の音楽です。調査をしていく中で、その答えを見つけることが出来ました。

今から 700 から 500 年ほど前、木氏というナシ族の酋長は、漢民族の漢詩や音楽文化を大変熱心に勉強しており、音楽を習ってくるようにとナシ族の人を南京に派遣しました。そのような記録は木氏が書いた漢詩の中に残されています。他にも、南京から楽師が来た際にどのような音楽を演奏したのかということも、漢詩の中にすべて表現されています。そして、派遣された人が南京から帰ってくると、一時は木氏の官邸の中で漢民族の音楽が演奏されました。しかし、1723 年に土司制度が廃止され、土司は平民になりました。これは、あまりにも土司たちの力が強いので、その力を抑えるために中央政府が土司という制度を廃止したということです。その結果、官邸で演奏されてきた音楽が、ナシ族の知識人の道教儀礼音楽として演奏されるようになりました。

ナシ古楽という名前は新しい名前です。実はここには隠れた論争もありました。ナシ古楽というのは最近作られた名前であり、中国では一番よく知られている名前です。では、本来の名前はなにかといいますと、本来は洞経（DONGJING）古楽です。この名前はどこから来たかということ、道教の経典『玉清無極総真文昌大洞仙経』からです。この文昌というのは文昌帝のことです。文昌帝は道教の知識の神様で、知識人たちは科挙試験に受ければ出世できるので、ナシ族は非常に勉強熱心だったともいえます。もう 1 つは『関帝覚世真経』というお経ですが、これは科挙試験の文武の武、つまり武術の神様のことです。しかしこちらより文昌帝、つまり文の神様の方がよく祀られていました。

洞経古楽は、もともとは男性のみの儀礼音楽でした。しかし、先ほどの写真には女性も写っていたと思います。それはすべて観光客のためです。そして、洞経古楽という名前はほとんど知る人がいなくなり、今のナシ古楽という名前になりました。

なぜこの音楽は麗江という場所に残され、私の故郷の西安や南京などの古い都では消えてしまったのか。それには 3 つの要因があります。1 点目に、麗江は山の奥にある町であり、山に囲まれた地域性のおかげで奇跡的に保存することができたのです。2 点目は、宗教のための音楽だということです。これはどの無形文化財にも、特に音楽には共通している点だと思います。たとえば、日本の雅楽が挙げられます。私は雅楽師の東儀秀樹さんのこともよく知っていますが、彼からよく聞くことは、雅楽は日本の天皇のために演奏する、あるいは神社で演奏するものであり、神様の前で演奏される音楽だから自分が勝手にアレンジしてはいけないということです。アレンジすることは神様に対して失礼なことになります。ナシ古楽も同じです。変えてはいけないという特徴があります。3 点目は、楽譜があったことです。楽譜があると全部ではありませんが、60%程度は昔のままで継承できます。なぜ楽譜があっても 60%しか継承できないかといいますと、これも有形文化財と違うところですが、無形文化財、特に音楽はこぶしが多いからです。こぶしは楽譜で記録できません。楽譜で記録できないものは口伝で次世代に伝えるのですが、口伝の場合は継承者がいなければそのまま絶えてしまいます。

楽譜による音楽の継承に加えてもう 1 つ難しい点は、継承者がいたとしても耳が鍛えられていなければ楽曲を聴いても覚えられないということです。それが無形文化財の無形であるというところの厳しい部分です。私は小さい時から音楽をやっていて、毎日ピアノで耳の訓練をしているので音感があります。二胡などの楽器はすべて自分の耳で音程を決めるため、耳を小さい時から鍛えないとチューニングが出来ず楽曲を覚えることもできません。耳が鍛えられていないと演奏する時に音程がずれてしまいます。こうした点が無形文化財を継承する際に非常に厳しいところであり、誰でも継承者になれるというわけではないということです。継承者を選ばないといけないということが老演奏家たちの悩みでもあります。

ナシ古楽は、最初は土司の官邸で演奏され、そのあとは富裕層の知識人の音楽となり、辛亥革命以降には庶民層にも広まりました。その後、文化大革命の時期に一時中断されました。演奏者も楽器も楽譜も、文化大革命でかなり破壊されてしまい、現在に残された楽器に古い楽器はほとんどなく、人々が昔の記憶に頼って新たに作られた楽器が多いのです。この点にはまた後ほど触れます。

3. ナシ古楽の成立と観光の影響——ツーリズム・コンサートの功罪

ここで、新しい名称の「ナシ古楽」の由来について説明したいと思います。最も代表的なナシ古楽会が麗江にあります。これはいま麗江に限らず中国の中でも一番知られている古楽会です。この古楽会はツーリズム・コンサートを最初に実施した古楽会でもあります。こ

この演奏会場の実質の経営者になっている方は、1990 年代にツーリスト・コンサートを始め頃に、自分の見解を入れて新しい名称を作りました。もともと洞経音楽と呼ばれていたものが、今はナシ古楽になったということです。彼の説明は、ナシ古楽は漢民族の音楽ですが、500 年以上ナシ族によって保存されているためナシ古楽と言ってもよいのではないかというものです。しかし学界では、歴史的な事実を重視し、洞経音楽、洞経古楽の方がよいのではないかという意見があり、両者の間には論争があります。私としては、もし洞経古楽というなら麗江洞経古楽と言ってもよいのではないかと思います。なぜなら、ペー族の大理や昆明など、周辺の地域にも洞経音楽はたくさんあるからです。

続いて、先ほど道教儀礼音楽の説明をさせていただきましたが、現在ナシ古楽自身がさらされている 1 つの危機についてお話しします。現在、ナシ古楽は観光客向けのコンサートがメインになっています。1 つのコンサートは 2 時間ほどですが、その中で演奏される楽曲は 8 曲だけです。その 8 曲のプログラムを変えることはありません。それでは、新しい演奏者たちが一緒に舞台上で演奏しても「私はこの 8 曲を演奏するだけでやっていけるんだ」と考えてしまいます。世界遺産となった麗江では、道教儀礼音楽がいまや観光客向けのものとして考えられています。この道教儀礼音楽の儀式自体には観光客は関心がありません。そのため、もともと儀式の中で演奏される曲は実用性がないために忘れられてきています。正直なところ、私が現在もっとも焦りを覚える点は、儀式の行程を知る老演奏家がほとんどいないことです。この儀式は 3 日間かけて行われるもので、最初から 3 日目の曲までのんびり演奏しつつ、お経を読みながら様々な儀式を行うというナシ族の伝統的なものですが、儀式で演奏される音楽も現在は驚くほどの早さで消滅しています。他の地域も同じような悩みを抱えているかもしれませんが、こうしたツーリズム向けではない儀礼音楽を今後どのように保存していくことができるのかという点は、1 つの大きな課題である思います。しかもそこに目を向ける人はほとんどおらず、ナシ古楽を研究している研究者の私しかこのことに気づいていないのかもしれませんが。麗江の政府の中には、こんなに古いものは別になくなってもいいのではないか、と思っている人もいます。スライドでお見せしている写真は、麗江古城から少し離れた田舎の村の様子です。椅子 1 つずつの上に道教の神様の名前が書かれており、ステージは昔の儀礼音楽のような形になっていますが、しかし演奏する時間は長くても 2 時間ほどです。つまり、ここも結局はツーリズム・コンサートを行う場所なのです。形だけは儀礼の場所のようではありますが、内容としては儀礼音楽を演奏していないということです。

スライドで最近撮影した写真をお見せしていますが、かつてのものと比較すると、まず細かいことですが、亡くなった方の写真がとて増えています。そしてもう 1 つは演奏者に若い女性が増えています。老人たちは目をつぶって眠っている人もいますが、ライトが眩しくてサングラスをかけているおじいさんもいます（笑）。さらに興味深いことは、ステージの上で寝ている人もいれば、聴きに來ているお客様も寝ています（笑）。それでも聴きに行きたいと思うのは、これが麗江の伝統、無形文化財の 1 つだからです。観光客の客層は、30 代

以下は少なくそれ以上の方が多いです。チケットは 3 種類売られており、前から 3 列目までが A 席、そこから後ろは安くなっています。1 番値段が高いチケットは日本円で約 2000 円です。

ここで、ツーリズム・コンサートについてご説明します。その始まりは 1986 年頃です。その頃の中国では開放政策が行われて間もなく、雲南省に入るには許可が要る時代でした。しかし、最初に麗江に訪れてきた人たちは中国国内の観光客ではありませんでした。イギリスの作家、ジェームス・ヒルトンが書いた『失われた地平線』という小説があります。その中に初めて出てきたシャングリラという地名がありました。今のシャングリラホテルではありません（笑）。シャングリラというのはチベットの桃源郷という意味です。欧米の人たちはその小説に憧れて桃源郷はどこにあるのかと思ったそうですが、その場所と考えられたのが麗江です。そして欧米のバックパッカーが 1986 年頃に最初に麗江を訪れました。先ほどの古楽会のリーダーであり、実質的な経営者である宣科氏はもともと英語の先生だったこともあり、英語で司会をして英語でナシ古楽を紹介しました。それが大ブームとなり、海外の観光客が口コミで増えて麗江で外国人の姿を多く見かけるようになりました。最初は無料だったコンサートですが、1 年後に審査に通って、週 2 回程度、定期的な有料コンサートを開催することとなりました。チケットは日本円で約 57 円でした。しかしここで注目していただきたいのは、当時の年間の収入が 1.5 万元、つまり約 25 万円であったことです。1987 年は、私の父の月収が 60 元、年収にして 720 元だった時代です。それがこの団体は、年間で 1.5 万元も稼ぎ出していたのです。

このナシ古楽自体が、中国初期のツーリズム・コンサートの先駆者でもあると言われています。しかし、このために現在は様々な問題が発生しています。ナシ古楽は文化経営の路線で大成功した 1 つの例であり、1995 年になると広い敷地を手に入れて 100 人ほどを収容できる劇場をオープンさせました。その後、1997 年に麗江が世界遺産に登録され、空港が開港したこともあり、観光客数は世界遺産に登録される前と比べて数倍に増えました。その時にナシ古楽団は、知識人たちの趣味の集まりから、中国麗江宣科納西古楽文化公司として会社化されました。そして宣科氏が代表になりました。つまり、麗江のもっとも古いナシ古楽のクラブが個人のものから企業へ変容しました。その後、中国の様々なところでナシ古楽団の手法が真似されましたが、それには賛否両論がありました。

そしてその後、収益も増加し会場も拡大されていきます。スライドでご覧いただいている写真は 600 人ほど入れる会場で、しかも麗江古城の中のメインストリートにあります。入口のところには前の中国の国家主席である江沢民さんの写真が飾られています。これは国家主席が私達の音楽を聴きに来たという宣伝にもなります。そして隣に古楽の楽器を売る売店まで作ったわけです。この会場は世界遺産に登録された 1997 年に 50 万元で購入されましたが、今では 50 万元では買えません。なぜなら、世界遺産なので麗江の戸籍を持っていないと地元の不動産を買うことが出来ず、土地の値段も 10 倍くらい高くなっているからです。私が 2001 年に行った際に、宣科氏から 7 万元、日本円にして 100 万円ですべての庭を買わないかと誘われたのですが、今考えてみるとその頃に買って置いて民宿の経営でもすれば良かったと思います。

す（笑）。今ではとても買えません。そして、2004 年には先ほどのコンサート会場に年間 19 万人の観客を呼びこむことに成功しました。1 日平均 520 人です。600 席のうち 1 階席は 500 席ですから、ほぼ毎日満席の状態です。団体の収入を見ていただくと、2004 年から 2010 年まで 100 万人以上の観光客がナシ古楽を鑑賞して、2010 年の収入は日本円にして約 1 億 2000 万円です。これは中国の中ではきわめて稀なことです。そして大研納西楽団と宣科氏は世界中で有名になりました。観光客が何を見に来たのかというと、やはり先ほど言っていた 3 つの古いものです。古い演奏者、古い楽器、古い楽曲。彼らは国内外から演奏のオファーを受け、時には政府にも招待されて、南京、北京、シアトルなどで演奏しています。

4. 無形文化遺産の観光化に伴う変質——ナシ古楽の危機

次に諸変化をみなさんに知っていただきたいと思います。これはナシ古楽に固有のものではなく、無形文化財としての音楽がステージ・観光化されると、似たようなことが発生してくると思われます。

まず、古楽会から有限会社が変わって入場料が倍以上に高くなりました。毎晩演奏される曲は同じで、若い演奏者は多くの儀式音楽を学習するチャンスがありません。私の調査では 2009 年から 2013 年まで演奏される曲はほとんど変わっていません。そして演奏スタイルを強調することです。儀礼音楽の演奏家は姿勢を正して座って演奏します。そのとき少しだけお話をしたり水を飲んだりすることは、会社組織になる以前は可能でした。しかし会社になってから演奏家たちは、ステージの上にいる者は教養のある演奏家であり観光客はそれを見に来ているため、ステージの上では勝手に動いてはいけない、と宣科氏に要求されてしまいました。これは老演奏家としては特に酷なことです。

もう 1 つ私が気づいたことは、もともとナシ古楽では使われていない楽器、それもオーケストラのようにバランスを取るための様々な新しい楽器を中に取り入れていることです。音楽のバランスを全体的に意識し、新しい楽器をこっそりと中に取り入れているという点も観光客をかなり意識してのことだと思います。また、舞台を華やかに見せるために女性歌手も増加しました。ナシ古楽はもともと男性のみの儀礼音楽ですが、女性の割合が明らかに多くなっています。

また、儀礼音楽本来のスタイルが喪失しつつあります。ステージ上の座る位置には神様の名前が付いています。誰がここに座る、というのはすべて決まっていますが今は流動性が激しくなっています。さらに経営者の意思によって人事も激しくなりました。最近は経営者の親戚が増えていて、それが嫌で辞める人もかなりいます。

最後に、若い後継者が不足しているという悩みと、年配者の苦勞です。先ほど申し上げたように、年配者の方たちは 2 時間動けず、しかも激しいライトに照らされるところに座っていて、それが毎日続きます。私は彼らと一緒に演奏しているためその辛さがわかります。私も一週間続けて演奏することは耐えられないと思います。毎日同じ演奏をしていると、以前

のように、家で娯楽として生き生きとした姿勢で弾こうとも思わなくなります。むしろ毎日演奏しているので、この楽器自体がいくら好きでも演奏することが嫌になります。一緒に演奏していると、演奏家のみなさんがツーリズム・コンサートのことで苦労している面も見えてきます。娯楽より仕事が優先になってしまっています。音楽の本来の出发点が変容してしまっているのです。

本来のスタイルでは、庭に集まって、お茶を飲みながら楽器を弾いて、神様を祀って、一緒に会食をして解散します。そしてまた次の朝に集まって、ということをして 3 日間行います。私はその場で演奏家とその家族のみなさんを取材したときは本当に生き生きとしていました。おじいさんたちが昔の楽曲を弾きながら楽しんでいるのが本来の姿なのですが、舞台になるとそうした姿が見られなくなります。

この楽団の年齢構成は、先述した文化大革命の影響を受け、いびつなものになっています。2000 年のデータを見ると、若い演奏者の人数は 7 名、30 歳から 45 歳は 1 人もいません。45 歳から 65 歳の方は 10 人で、65 歳以上の方も 12 人います。この時の 30 歳から 45 歳は、ナシ古楽を習うことを禁止された文化大革命の時に学生だった世代で、ここに大きな年齢の断層があります。20 歳から 30 歳までの演奏家のうち、女性が 6 人、男性が 1 人ですが、ほとんどは 60 代の演奏者の子どもたちです。父の命令でナシ古楽を勉強しなくてはいけないということで演奏家になったという側面もあります。毎日 2 時間の演奏を繰り返せば 1 ヶ月分の給料が稼げるため、こんなにいい仕事だったら女性の方が割に合うという考えが広まったため、女性が多くなっています。このように知らないところでどんどん変化していきます。

次に 2013 年のデータを見てみましょう。お亡くなりになった演奏家も多いため、今度は高齢層が少なくなり、78 歳以上が 8 人です。続いて上の世代から順に、58 歳から 78 歳が 10 人、43 歳から 58 歳が 2 人となります。40 代と 50 代がやはり文化大革命の影響を受けて少ないということがわかると思います。そして 20 歳から 43 歳を見てみると、10 年前には 7 人もいたのに、今は 3 人しかいません。やはり毎晩ステージに座って窮屈な姿勢で演奏するのは耐えられないということで、辞めた人も多いということです。私は調査に行く時だけ演奏しますが、それに比べ彼らは毎日演奏するわけですから、考えられないくらいの苦痛だと思います。この年齢の変化を見ると、これから継承という問題をどうするかということは深刻な問題であるとわかります。

次にツーリスト・コンサートのための音楽となったナシ古楽に直面する最大の危機についてお話しします。

1 つ目は儀礼についてです。儀式自体の消滅によって、多くの伝統的な道教儀式古楽が急速に消滅の道を辿っています。これは道教の儀式の実用性がなくなっており、その時に演奏される 20 曲以上の曲は老演奏家が亡くなると同時に消滅していくからです。

2 つ目は若者が古楽を学習する従来の楽会（学習会）が開かれる機会が減っていることです。先ほど申し上げたように、楽曲は口伝が大事であり、若者は週に数回開催される楽会で耳を鍛え、技術を覚えます。しかし、ツーリスト・コンサートがあまりにも成功しているため毎

晩開催されるようになり、演奏家は疲弊してしまい楽会が開かれなくなっています。そのため若者は完全に独学でやるしかない、という状況が非常に危機的な点であるといえます。現在は様々な地域において、無形文化財をブランド化して観光開発しましょうというスローガンをよく見かけますが、無形文化財の難しいところは人が操るものであるということです。麗江のように、やり過ぎるとこのようなマイナスな面も出てきてしまいます。

5. 文化遺産リストへの登録ブームとその課題

また、文化遺産の諸リストへの登録がブームになっていることも1つの問題かもしれません。麗江は1997年に世界文化遺産に登録された当時、少数民族の地域としては早くに登録された地域でした。それにより観光客が殺到したため、世界遺産にさらに登録の申請をしようという機運になり、2003年には世界自然遺産にも登録されました。また、その年の8月にユネスコ記憶遺産にも登録されました。1つの都市で「世界遺産」が3つもあるのは珍しいことであり、麗江は中国でもっとも人気のある観光地となりました。しかし私は、これは過剰な開発ではないかと考えています

ここで、同じくユネスコによる無形文化遺産リストの話題に移ります。2003年に無形文化遺産保護条約が採択された直後、ナシ古楽会の宣科氏が早くも申請の準備を進めていました。彼は芸術家というより経営者です。しかし、ユネスコには認められず登録は失敗しました。理由は先ほど申し上げたナシ古楽の名前についてです。名前が本来のものと違うと中国の芸術評論家から否定され、ナシ古楽は古来のナシ族の音楽ではないという理由で彼の申請は却下されました。2006年に中国国内で「国家級非物質文化遺産」、つまり無形文化遺産のリストが作られました。その中にすらナシ古楽の名前はありませんでした。この理由も、音楽の商品化をめぐる、研究者との間に溝があったためです。申請が却下されたことにより、一般の人びとからは、世界遺産のリストにも認められなかった音楽だから偽物であろうと、音楽自体に疑問を持たれるようになってしまいました。それは、私は非常に残念だと思っています。一方で、保護リストに登録されても保護できない音楽もあるのです。

中国の非物質文化遺産は2回の選定を経て出来た、芸能や小説、伝説、技術などのリストです。その中には約800の項目が登録されています。800以上もあるのにナシ古楽の名前がなかったのが不思議で仕方ありません。文献を調べるとこれほどまでに古い音楽なのに、なぜ否定されたのだろうか。その理由は、商品、ツーリズム・コンサートとして成功したからであると考えられる点について、私は不満に思っています。今後は中国の学会においてもそのようなことを発言していきたいと思っています。

さて、ナシ族にはナシ古楽以外にもう1つ音楽があります。その音楽は中国の非物質文化遺産に登録されましたが、葬式のときに演奏される音楽なのでツーリズムには合わない音楽です。リストには登録されましたが、その音楽の存続も問題になっています。現在中国はこの非物質文化遺産リストに登録することがブームになっており、先日私が中国の実家に帰っ

た時には、西安の姉から土産としてもらったお菓子の裏にも、中国無形文化遺産（非物質文化遺産）リスト登録と大きく書かれていました。その一言があれば売れるのでしょうか。とにかく、今はそれがかなりブームになっています。

リストへの登録の効果によって、無形文化遺産の重要性について、中国全土でかなりの関心を集めることができたことは非常に良いことでしょう。しかし、私が先ほど申し上げたように、リストに登録されても実用性がないため継承ができないということが問題になっています。リストの中には、ツーリスト音楽に適合しない音楽も数多くあります。いくつかの例をお話しします。

まず白沙細樂、これは主に葬式や祭祀の時に演奏される音楽です。スライドの写真を撮った数年後に、この一族に会いに行った際には、こちらの継承者の方がお亡くなりになったため葬式が行われており、村の人たちが皆集まっただけの追悼のコンサートも行われていました。しかしこの一族は、リストに登録されても何も援助がありません。私が 2006 年に行ったときには町の広場で観光客向けに演奏していましたが、メロディーがとても悲しいため観光客は誰も足をとめてくれませんでした。このような方法でお父さんの医療費を払っているようで、見ていると切なくなります。2004 年には、先ほどのおじいさん（継承者）が隣の小学校で子どもたちに演奏を伝授している様子を見ることが出来たのですが、1 年後にはこのような機会はなくなりました。また別のケースとして、トンパ教の儀礼、儀式があります。これらは一時的にステージで表現されましたが、これも 4 年前になくなりました。やはり儀式に関するものに観光客は興味を持っていないということがわかります。

最後に私の調査方法についてご紹介します。2001 年から私は麗江を訪れて調査しています。楽譜を起こしながら、演奏家の方々と楽器を演奏しています。先ほど言い忘れてしまいましたが、私はツーリズム・コンサートで演奏するときに 1 つ嫌なことがあります。それは宣科氏からトルコ行進曲を弾いてくださいと言われることです（笑）。私としてはここに古楽の演奏調査として来ているのに、なぜトルコ行進曲を毎晩弾かないといけないのかと思ってしまいます。この曲は中国琵琶の中でも早弾きの曲であり、それを弾くと観光客は非常に喜ぶわけですが、それが少し苦痛に感じることもあります。名誉会員として老演奏家たちの家を訪問し様々な楽譜の採譜をしながら、先行研究も参照しつつ研究をしています。

この調査方法は参与観察調査といいます。内部者としての利点は、普段みなさんが見られないところを見ることができることです。そして、内部資料を得ることもできます。また、老演奏家の方は普段披露しない音楽も教えてくれます。それは同じ演奏家だからこそ信頼されている部分でもあります。そしてステージの構成やプログラムを、観光客向けにどのように意識して作っているのか、両方の立場から理解することができます。さらに、同じ演奏者なので演奏者側の心理的な変化を体験することもできます。

発表を締め括るに当たり、今後のナシ古楽をどのように継承していけば良いのかを検討したいと思います。どのように歴史と結びつけて継承していけるのか。これについては私なりの観点もありますが、この場でお話しすると長くなってしまいます。そこで、2 年前に私が作

った、古楽のメロディーを何も変えずに現代風にアレンジした音楽を聴いていただきたいと思います。これは麗江の中でナシ古楽の 1 つの教材として使っている方もいます。若者が古楽を継承していくとき、やはりワクワクした気持ちがないと辞めていつてしまいます。そこで若者のニーズにも合うような今後の継承法の一例として、最後に 2 分ほどみなさんに聴いていただきたいと思います。最初の前奏の部分の演奏は老演奏家たちの演奏で、後半は少しアレンジしたものです。これを聴いていただければ、この時代に合う継承法が少しだけわかりいただけるかと思います。

(音楽再生中)

それではここまでにしたいと思います。さらに聴きたい方はぜひ Amazon で購入してください（笑）。このように若者のニーズに合わせた古楽の継承を考えながら、生きている無形文化遺産という言葉を大事にしていきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

<<質疑応答>>

河野隼也

私も 10 年ほど前に学生だった頃に山村先生にお連れいただいて麗江には 5、6 回ほど行っており、久しぶりに麗江の写真を見たり音楽を聴けたりして非常に懐かしく思っております。

現在私は観光の様々な企画をしながら WEB のデザインやおみやげのデザインをしたり、オブジェを制作したりするクリエイターとしても活動しております。ティンティンさんが研究者でありながらプレイヤーでもあるという独自の視点で見られる様々な問題意識や危機感というのは、内部にいてプレイヤーであるからこそ得られる視点だということでそこに大きな敬意を表したいと思います。

私が感じたことについてお話しします。麗江の街に行くと建物が古いのですが中がおみやげ屋やファストフード店になっていたり、ナイキのお店になっていて所狭しとスニーカーが並んでいたりします。オーセンティシティという観点から見ると、そのありかたというものに疑問を呈される方が当時もたくさんいらっしゃいました。それはそれで正しいことだと思いますが、私としては昔からある建物が今に生きている感じがします。先ほどの妙木先生の話の中でも出てきたように、お上が良しとしない大衆文化と言いますか、根深く残っていくとさすがに非常に大きな魅力だと私は感じました。

麗江にはとても魅力を感じていましたがレジメの最後のほうにあるのはナシ族のランドマーク、科貢坊でしょうか、科挙に合格した人の名前をこの塔にかかげるところだと思うのですが、ここがディスコ・バーになっているというのは驚きました。

先ほどの、本来の儀礼音楽である部分が継承されていくのが難しい状況で、観光のためのコンサートがメインになっていて演奏される楽曲も限られており、若い人になかなか継承さ

れていかないという問題意識についてですが、この儀礼はもともと科学試験ありきのものですよね。要は学問の神様の儀礼として学術成就のご利益に預かるということだと思います。私が感じたのは楽曲だけを継承していくのではこういう状況では難しいと思いますが、学問の神様をお祀りしてご利益を授かるというその必然性というのは現代もまだ生きています。

私がまちおこしでお手伝いしている大將軍商店街というところのすぐ近くに、北野天満宮という大きな神社があります。そこは菅原道真公をお祀りしている全国の天神宮の総本社で学問の神様として非常にご利益があるということで毎年受験シーズンになると全国からたくさんの方々が来てお参りをされておみくじや御札を買って行かれます。中国にもそういう必然性というのがあると思うので、楽曲を継承していくためにもそれがもともと持っていた役割の必然性も継承していくかたちにできれば、必然性が残るということで継承の助けになるのではないかと感じました。以上です。

田代亜紀子

ご発表ありがとうございます。まだこの麗江で研究を続けているということは大変なことだと思います。長期間麗江に関わっていらっしゃって、その成果もおそらく 10 年前と少しずつ変わってきていると思います。今回の内容でおもしろかったことは、前回はナシ古楽がどういうふうな麗江の観光というものに影響されたかということについてお話いただいたと思いますが、今回はナシ古楽に関わっている人が経済的にも成功して、世界的にナシ古楽が有名になったが、そのあとに危機を迎えた、というのが新しい部分として出てきたと思います。さらに、そのため、ユネスコの無形文化遺産にも登録できませんでしたというお話があり非常に驚きました。

宗先生の研究のおもしろい点は、有形の麗江という世界遺産とセットで考えられると思われるナシ古楽を扱っていることです。つまり、このナシ古楽は、麗江と切り離して考えることはできないものなのかと考えています。たとえば、カンボジアのアンコール・ワットでアプサラの踊りなどが行われていますが、それはプノンペン、王宮の周辺が中心であって、もともとアンコール・ワットであったわけではないのです。しかし現在は、アンコール遺跡群とセットで考えられているようなことがあります。麗江というのはもともとセットで、かつ非常に強く残っているケースであると思いました。

宗先生にお聞きしたいことは、昨日と今日の論議の中でコンテンツ・ツーリズムについて議論されてきましたが、宗さんのご意見として自分の音楽コンテンツとツーリズムの関係が麗江のケースを見る限りどう理解できるか、ということについてご意見いただけたらと思います。というのは、実は昨日からのご発表を聞いておまして、大衆文化というものが出てきてから、宗先生のヘリテージの話があったとき、非常に正統派な、大衆文化というよりはハイカルチャー、高尚な文化という印象があったので、ここまでの他の先生方の発表とどのようにつながっていくのか考えました。やはり観光によってハイカルチャーがサブカルチャー

になっていくという、1つの方向性があるのかもしれないというふうに思いました。宗先生ご自身の意見をいただけたらと思います。

宗ティンティン

ありがとうございます。実はこの10年間の中ではナシ古楽にも様々な変化が起きました。昨日からのご発表を聞いていると、それぞれの事例とナシ古楽の事例に共通している点、異なる点があり、考えをまとめているところです。

ナシ古楽の事例でいえば、今は「バランスを取る」ことが一番重要だと思います。ツーリズム、世界遺産という大きな動きの中にある無形文化財の継承や保存に対しては、バランスが非常に重要です。今の状態はバランスが崩れているような感じです。たとえば、経営者として観光客向けのツーリズム・コンサートということを意識しすぎると、演奏者もバランスが悪くなります。しかし、演奏者の意見ばかり尊重すると経営として成り立たなくなります。政府の対応も含めて、そのあたりをもう少し深く考えた方が良いかと思います。

また、古い演奏グループの中にも新しい動きがあります。たとえば、最近では偽物の老演奏家も増えています。2年前に調査に行った時には、麗江ではなぜ高齢の演奏家がこれほど多いのかと驚きました。昔は教養の高い知識人しか演奏できなかったはずの音楽です。2000年の調査の際に知り合った知識人のおじいさんたちが亡くなっていく中、なぜいまだに老演奏家が多いのだろうと思って調べてみると、1つの事実がわかりました。村の中で、60代以上の老演奏家はわざとヒゲを伸ばしてそれらしく装いますが、実は年老いてゼロから勉強をするという人も多いということです。見た目は老演奏家ですが、演奏を聴いてみると驚くぐらい下手でした（笑）。しかし、観光客にはわからないという面もあって、いわば古いものの中に新しいものも共存しているような状況です。これも1つの観光開発のマイナスの面なのかと考えるようになりました。

今後は麗江だけではなく、他の地域も観察していきたいと思っております。

無形文化遺産リストの光と影～ 音楽コンテンツとツーリズム

—— 中国雲南省麗江ナシ古楽を事例として

中部大学・国際文化学科 講師

中国琵琶奏者

宗ティンティン

ナシ古楽の研究を始めた動機

- 継承者不足ということを認識し、自ら継承していきたい。
- 中原漢民族の旋律によく類似していて、その謎を解きたい。
- 壁画にしか見られない中国古代楽器の形に近い楽器今だに使われ、その関連性を辿りたい。

納西古楽は格式の高い中原 漢民族の宮廷音楽であった

- 1253年～1723年までナシ族を統治していた木氏は、漢民族の漢詩、音楽、文化、風俗などを熱心に習い、「長安」や「南京」明朝の宮廷音楽と見られる音楽を自分の土司官邸に取り入れて発展させた。

しかし、木氏が政権を失った1723年（改土帰流）以後は、道教儀礼音楽としてナシ族の知識人や裕福な階層の人々が演奏するようになった。

納西古楽本来の名称

- 「洞経古楽」 (DONGJING)とも呼ばれています。
- 道教の教典『玉清無極総真文昌大洞仙经』（略称洞経）と『関帝覚世真経』を賛美する時に奏でる男性のみの儀礼音楽であった。
- ナシ族の知識人はこの二人の神を崇拝し、特に科挙試験を重視する文人たちは道教知識の神様「文昌帝」を多く祭るようになった。

地域の閉鎖性と宗教音楽に守られた 納西古楽

- 辛亥革命から氏族音楽が庶民層に流れ、文化大革命期間中は一時中断されたが80年代の開放政策と共に演奏活動が復活し、楽譜があったことと宗教音楽という特質があったため、従来の旋律から殆ど変わっていないと推定される。

新しい名称「納西古楽」

「納西古楽」と呼ばれたのは1990年代のツーリストコンサートが始まった頃大研納西古楽会の会長（実質の経営者）宣科氏が観光客より覚えやすいため更に自分の見解を入れて作り上げた新しい名称である。この名称について学术界では議論になっているが新聞や民衆の中では「洞経古楽」より「納西古楽」の方が一般的に使われている。本発表では「納西古楽」（ナシ古楽）を使用する。

白樺楽団の演奏舞台
真なんか飾られているのは道教知識の神
「文昌帝」



麗江ツーリズムの発展に伴ってナシ古楽 ツーリストコンサートの隆盛

- 1986年週一回程度、無料で対外公演。
※会長宣科氏が英語で司会をしていたので欧米から
来た外国人が大変喜ぶ。
- 1987年、県の文化局などの審査をパスして、週二
回程度の初めての定期有料コンサートを決定。チ
ケット4元（約57円）年収1.5万（約25万
円）。

文化経営の路線大成功

- 1995年民家から改造された100席ぐらい保有す
る小型劇場が毎晩殆ど満席となった。
- 1997年12月麗江は世界遺産に登録、観光客が
年々と急増していた。
- 1997年麗江空港オープン
- 1997年民間団体の大研納西古楽団は「中国麗
江宣科納西古楽文化公司」という会社として
設立し、楽団をリードしていた宣科氏は自ら
企業法人代表になった。それ以来麗江最も古
い納西古楽俱樂部が個人所有の企業へと変容
した。

ツーリストコンサートを行う古城内の 演奏会場



- 1997年600人が入る今の新華街の劇場を50万元で購入した。
- 2004年一年間で19万人の観客を集まった。平均1日約520人。
- 2004年～2010年まで100万人以上の観客がナシ古楽を鑑賞し、2010年一年間だけの収入が700万元（約一億2000万円）という莫大な利益を得た。中国の文化産業のなかでは極めて稀のことであった。
- 「大研納西楽団」の経営者である宣科氏も一躍世界的に有名人になった。

・ ツーリストコンサートの隆盛によって
ナシ古楽は世界各地で演奏するようになった



2002年2月北京にて



2002年5月「シアトル国際青少年芸術祭」

21世紀になってからツーリストコンサートの隆盛と共に伝統ナシ古楽の諸変化

- ・ 古楽会から有限会社へ。
- ・ 入場料高くなった。
- ・ 毎晩演奏されている曲殆ど同じく、若い奏者は多くの儀式音楽を学習するチャンスがない。
(2009年～2013年コンサート中に演奏された8曲は全く変わらない)
- ・ 演奏スタイルの強調 (観光客を意識した三つの古い)
- ・ 舞台が華やかに見せるため、女性歌手の増加。
- ・ 儀式音楽本来のスタイルの消失 (座る位置の随意性)
- ・ 経営者の意志による人事のいれかえが激しくなった。
- ・ 若い後継者の悩みと年配者の苦勞。
- ・ 娯樂より仕事。

2000年の時の大研ナシ古楽団演奏者年齢表

若い演奏者は年配演奏者の
こどもに当たる

30代と40代の断層現象



2013年大研ナシ古楽団演奏者年齢の変化

2000年の時の20代は殆ど
辞めていた

断層現象で中年の継承
者不足している



ツーリストコンサートになったナシ古楽に面する最大の危機

- 本来される多くの曲は市場経済及びツーリストコンサートに相応しくないため、更に儀礼儀式自体の消滅により、多くの伝統道教儀式古楽がハイスピードで消滅の道を辿りつつある。
- 演奏者高齢化のため、若者が古楽を学習する従来の「楽会」の停止によって、演奏水準を低下している。
- 毎晩120分演奏する奏者の疲労感による伝統音楽の継承に対する意欲の低下。

文化遺産リストへの登録ブーム

- 麗江古城は1997年世界文化遺産に登録してから2002年までナシ古楽団は世界14か国に招かれ、演奏していた。
- 2003年には「三江併流地区」が「世界自然遺産」に登録。
- 同年8月ユネスコ「世界記憶」リスト（MEMORY OF REGISTER）に登録。

一つの都市で世界遺産3つあるのは大変珍しい事である。麗江は中国最も人気の観光地となった。

・「ユネスコ無形文化遺産保護条約」への登録

✿申請：2003年の「世界無形文化遺産条約」の認定は観光客に大変人気であるナシ古楽にとって大きな朗報であった。早い段階から、他の民族よりも早く無形文化遺産の申請準備に着手した。しかし、この申請はツーリストコンサートで巨額の収益を得た大研ナシ古楽団に偏見を抱く芸術評論家呉氏と田氏の阻止行動により結局は却下され、失敗に終わった。

✿理由：「申請する項目の名前は「納西古楽」だが、「古来から納西族の音楽ではない」という理由であった。

✿悪影響：この影響で2006年から3回実施された「中国級非物質文化遺産名録」の登録の中すら「ナシ古楽」の名が無かったことである。ナシ古楽の真実性に民衆が疑問に思った。

✿音楽商品化による研究者との溝：ツーリストコンサートの成功が齎した人的なトラブルもしばしば見られる。無形文化遺産登録の失敗によって、音楽本来の文化的価値を見失い、結果としてナシ古楽の歴史をよく分からない人々が音楽自身に不信感を持ち、歴史の古いナシ古楽の継承に非常にマイナスな影響を与えていた。

保護リストに登録されても保護できない 弱小無形文化遺産の保存と継承

・「中国級非物質文化遺産名録」

2006年5月20日、中国式の無形文化遺産リスト『关于公布第一批国家级非物质文化遗产名录的通知』

（『第一回国家級無形文化遺産リストに関する公布通知』）をおこなった。その結果、一定の条件を満たし、一回目のリストに選定された種目はなんと518個を数え、2回目のリストに登録されたのは1回目を上回って551項目となった。3回目の登録数は191項目にとどまった。

名録の公開により、中国全土に無形文化財の重要性への強い関心を集めることができた。

ツーリズムに合わない弱小音楽 「白沙細楽」

- 「白沙細楽」724年の歴史を持つ麗江ナシ族の古典音楽の一つである。葬式や儀式の時に演奏される哀愁溢れる音楽である。2012年「中国級非物質文化遺産名録」に登録されたが政府からの経済的な援助殆どなく、こうした悲嘆的な音楽で楽しみを求めて麗江へ観光に来る観光客には魅力を感じさせるものではなく、継承維持が一番の悩みとなっている。
リストの中こうしたツーリスト音楽に適合しないような伝統音楽が数多く存在している。

内部の奏者としての参予観察と調査の方法

- 2001年夏研究のために初めて麗江に訪れた。宣科会長から出演を誘われた。
- 毎晩演奏しながら楽団のシステムと仕組みを調査する。
- 2002年正式に名誉団員に認められて以来、老演奏家の家を訪問し、ナシ古楽の継承制度やナシ古楽の歴史と楽譜などを記録する。
- 現地調査をしながら、麗江、昆明、北京にある図書館で資料先行研究を行う。

内部の人間そして演奏者としての利点

- 楽譜を採譜することができる。音楽は無形から有形に変化させ。
- お互いに演奏をし合って、信頼感を得ることができる。普段披露をしない楽曲も伝授してくれる。
- 内部観察や内部資料を得ることができる。
- 演奏家たちと一緒に舞台上で演奏することによって、観光化に応じてショーの内容変化を緊密に観察することができる。
- ツーリストコンサートの演奏者として奏者側の心理的变化を体験することができる。

客観性(研究者)と主観性(演奏者)を持つ私による 今後の継承に対する意見 その1

- 一部の音楽学者の誤解・・・・・・ツーリスト音楽の成功に目がくらみ、本来の芸術性を尊重すべき。
- 貴重な無形文化遺産を国を挙げて保護すべき、保護法から始め、文化遺産に対する詳細な調査制度、基準、記録、財政優遇、関連法律の確立、データベースの共用などの保護体制を確立しなければならない。

その2

- 「芸術の真髄は商品ではない」という事を認識する。
- 今から継承者を育つことは至急な課題である、伝習館の再開など。
- 地元の小学校に納西古楽や白沙細楽の授業を展開する。
- 実用性が失っている道教儀礼儀式全般を文字と映像で詳細に記録し、データベースを保管すること。
- 若い納西古楽の継承者に政府の職を与えるなど

最後にナシ古楽が生きる大環境である麗江古城のツーリズム動態について述べる

現代都会人が古城に持ってきた

遊民文化の隆盛

ツーリズムが齎した各関係の変化

- 個人の会社になると
経営者 —— 社員 雇用関係に変化
- 外来人口の増加によって古城との関係は
古 城 — 外来商人
金銭利用関係に変化

ツーリズム発展の困惑への解決道

- ツーリズムの開発は原住民の文化と慣習を尊重すべき。
- 納西族の若者が遊民文化に流されないように自民族の歴史真髄を学ばせ、安定した就職チャンスを与えること。
- 政府も税収ばかり考えてはいけない、文化遺産の保存に良い環境を提供すべき。

例「麗江は出会いの町というイメージから脱出」

無形文化遺産の特質を認識しましょう

無形文化を担う主宰者は「」
「人」の特質を考慮しながら単なる「保存」
や「保護」ではなく、「伝統に基づいて革新
する」ことに若者に魅力を感じさせ、温かい
目で見守る寛容的な環境が必要だと私は考えて
いる。